

## 序 文

私たち人類は、社会がいま必要としているものを知らなくてはなりません。では、なにが必要なのでしょうか。世界は、もはや特定の国や社会という地理的な制約に縛られなくなっています。社会は中世よりも拡大し、1つの国家、あるいは1つの社会になろうとする世界的傾向が強くなっています。『シュリーマド・バーガヴァタム』が説く精神的な理想の社会は、全人類の、否、全生物の力によって築かれています。偉大な思想家たちは、その社会を実現させる必要性を痛感しています。そして、その必要性を満たしてくれるのが『シュリーマド・バーガヴァタム』であり、だからこそこの書物は *janmādy asya yataḥ* (ジャンマーディ アッシャ ヤタハ) (第1編・第1章・第1節) というヴェーダンタ哲学の金言から始まり、共通の原因にもとづく理想社会を明確にしています。

現代社会はすべてを忘れてしまった状態にあるわけではありません。物質的に満たされた社会、教育、経済発展を求めて世界は急成長を遂げました。にもかかわらず、世界のどこかでなにかしらもめごとが起こり、その結果、些細な問題をめぐって深刻な紛争が起こっています。世界はいま、人類共通の理念に根ざした平和、友好関係、繁栄において一つになるための手がかりを必要としています。その手がかりをしめすのが『シュリーマド・バーガヴァタム』です。この書物が、全社会をふたたび崇高な世界に戻す文化的な教えを提示しているからです。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、学校や大学でも取りいれられるべき書物です。偉大な生徒、そして献愛者であるプラフラダ・マハーラージャが、社会の無神論的な状態を変えるために勧めているからです。

*kaumāra ācāret prājño  
dharmān bhāgavatān iha  
durlabhaṁ mānuṣaṁ janma  
tad apy adhravam arthadam*

(『シュリーマド・バーガヴァタム』第7編・第6章・第1節)

世の不均衡は、神を信じない社会ために生じる「正しい原則の喪失」が原因です。神、すなわち万物を発生させ、万物を維持し、やがて万物を吸収・休息させる全能者は存在しています。物質科学は、無益な手段で創造界の究極根源を見つけようとしています。この世に存在する物すべてに究極的な源があることは疑いようのない事実です。この究極の

根源については、美しきバーガヴァタム、すなわち『シュリーマド・バーガヴァタム』のなかに合理的かつ正しい典拠にもとづいて説明されています。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、万物の根源である神を知るための崇高な科学であると同時に、神と私たちの関係を知るための、そしてこの完璧な知識にもとづいて社会を完成に導く私たちの義務を知るための科学でもあります。サンスクリット語で書かれた力みなぎる書物であり、読者が注意深く読んで神を完全に理解し、啓蒙を受けて無神論者の攻撃から身を守ることができるよう、このたび英語で出版されることになりました。さらに、この本を読んだ人は「神は実在する根源の人物である」ということをほかの人にも理解させられるようになります。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、究極の根源者を定義する言葉から始まります。この書物は、『ヴェーダンタ・スートラ』の著者シュリーラ・ヴァーサデーヴァによる『ヴェーダンタ・スートラ』の正当な解説書であり、その内容は徐々に展開されて9つの編となり、神の悟りという頂点に達します。超越的知識を満載したこの偉大な書物を学ぶ唯一の資格は、着実かつ細心の注意を払って読みすすむことであり、ふつうの本を読むような気まぐれな飛ばし読みは慎まなくてはなりません。1つの章を読み終えてから次の章に進んでください。サンスクリット語の原文、そのローマ字表記、語意、訳文、要旨解説を学ぶことで、読者は最初の9つの章を読みおえた時点で神を悟った魂になれるよう配慮されています。

第10編の内容は最初の9編とは明確に異なっています。それは、最高人格主神・主クリシュナの崇高な活動そのものについて述べているからです。9つの章を辿ってきていない読者は、この第10編の奥義を知ることはできません。『シュリーマド・バーガヴァタム』は合計12の編で構成され、各編は独立していますが、短い部分であっても一つひとつ読みすすむことで、だれでも素晴らしい恩恵に浴することができます。

筆者は、『シュリーマド・バーガヴァタム』を解説する自分の未熟さを承知していますが、それでも、以下に挙げる言葉（『シュリーマド・バーガヴァタム』第1編・第6章・第11節）の力に支えられ、世の思想家や読者から善き反応が得られることを望んでいます。

*tad-vāg-visargo janatāgha-viplavo  
yasmin prati-ślokaṁ abaddhavyaṁ api  
nāmāny anantasya yaśo 'ñkitāni yac  
chṛṇvanti gāyanti gṛṇanti sādhaḥ*

「いっぽう、無限なる至高主の名前、名声、姿、娯楽という超越的な栄光に満ちあふれた書物は、まちがって導かれている文化での不信心な生活に大変革をもたらす崇高な作品で

ある。そのような書物は、たとえ拙い文章で書かれていようとも、正直な心を持つ無垢な人々によって聞かれ、歌われ、そして受けいられるのである」

*Om tat sat* (オーム タトゥ サトゥ)

A. C. バクティヴェーダンタ・スワミ

1962年12月15日

デリーにて